

Title	織豊系城郭の形成
Author(s)	千田, 嘉博
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/42842">https://hdl.handle.net/11094/42842</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	千田嘉博
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第15612号
学位授与年月日	平成12年5月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	織豊系城郭の形成
論文審査委員	(主査) 教授 村田 修三
	(副査) 教授 小林 茂 助教授 福永 伸哉

#### 論文内容の要旨

本論文は、申請者が概念化した織豊系城郭を中心に、中近世移行期の城郭の実態と歴史的意義を解明しようとしたものである。序章、第1編3章、第2編4章、第3編4章、第4編2章、終章の計15章から成り、枚数は573枚(400字詰め換算)で、他に図が91頁分ある。

序章で本論文の課題を明示したうえで、第1編「城郭研究の視点と方法」では、中世城郭研究の歩みを近代以前から説き起こし、旧陸軍の築城史研究と決別して勃興した民間学としての城郭研究の成果をふまえて、現在諸学問分野にまたがる総合的な城郭研究が進展していることを述べ、論点を明らかにして本論文の課題との関連を確認する。そして以下の諸章での分析の史料となる縄張り図の作成方法とその有効性について具体的に説明し、城郭の軍事性を読み解くことによって城郭を用いた中世史研究が可能になると論じる。

第2編「城郭構造の変遷」は、中世城郭の構造が権力との関わりでどのように変化して織豊系城郭を生みだし、それが近世社会の中で崩れて行くかという、本論文の中心的なテーマを扱った諸章から成っている。「室町期城郭の系譜」では、切岸によって防御された山城が室町期に堀を加えてより嚴重に防御されるようになり、平地の館とセットになった詰めの山城が日常的に維持される、いわゆる根小屋式城郭が成立することを述べた。そして「守護所から戦国拠点城郭へ」で、平地の館型の守護所から大名の政治支配機能を備えた拠点山城への転換が16世紀第2四半世紀の天文期にいっせいに起こったことを明らかにし、それが戦国大名の自立的な領国支配の開始に対応していることを指摘した。「織豊系城郭の成立」では、戦国期拠点山城が近世城郭へ転換する画期をなした織豊系城郭の展開過程を、城の出入り口(虎口)の形態編年に焦点を当てて分析し、発展を5段階に分類して基準年代を提示した。そして「集大成としての江戸城」で、その織豊系城郭プランが意味を失い崩壊していったことを明らかにし、近世城郭が軍事施設から権力の象徴空間に変貌していくことを指摘した。

第3編「城郭と地域社会」は、分布と比較、および都市論の視角を導入して、城郭が地域社会の中で占めた位置について論じた諸章から成る。「戦国期城郭の地域性」では、規格性をもった館型城郭から求心的構造をもった山城タイプの戦国期拠点城郭への発展をみた関東～北九州に対して、東北と南九州は非求心的・並列的な館(たて)屋敷型城郭が分布し、さらにその周縁にチャシ型城郭の北海道とグスク型城郭の琉球があるという、5地域に日本列島を分類し、巨視的な地域性を論じた。「村の城をめぐる5つのモデル」は、小規模城郭を素材にして、村落と領主の関係に応じて特徴的な城郭プランが展開したことを明らかにし、城郭から地域構造を読むための基準モデルを示した。

「尾張国の織豊期拠点城下町網」は、尾張国で一国レベルの中心地清洲城下町の成立の前段階に、支城を核とした城下町網の成立があったことを、城郭編年の手法を用いて明らかにした。「中世城郭都市の形成」は、ヨーロッパ中世のインカステラメントの研究調査成果を取り入れて、集落や都市的な場の形成に城郭が果たした政治・経済的な役割を、ヨーロッパと比較した。

第4編「城郭と戦い」は、最近中世史研究者の間で関心の高まってきた戦いの実態の問題を城郭史研究の立場で受けとめたもので、中世の戦いを弥生時代およびヨーロッパと比較して論じている。

終章「織豊系城郭体制の成立」は、並列的な構造の城郭から求心的な城郭への転換が権力構造の求心化に対応するものであったことを解明した。統一政権の拠点城郭の出入り口の型式によって全国の大名居城を分類した結果、安土・大坂・聚楽第・江戸城等を規範としその出入り口プランを分有する形で、各地の近世城郭が築かれたことが明らかになった。その求心型プランの究極の形は城下町において総構え型となって普及した。以上を総括して、城郭から近世封建社会の成立を見れば、全国的な織豊系城郭・城下体制の成立と評価できると締めくくっている。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は申請者の国内外の現地調査の積み重ねと、考古学・歴史学の両分野にわたる先行研究の批判的吸収を基礎にして積み上げた成果である。そのうち研究史上最も大きな影響を与えた成果は、織豊系城郭の虎口の通路の折れと空間の組み合わせに着目してその型式編年に成功したことであり、その特徴を有する城郭を「織豊系城郭」と呼ぶことも学界で定着するに至っている。つぎに城郭構造の並列性と求心性の対比と前者から後者への転換という視角で全国の戦国期の城郭を時間的ならびに空間的に整理し、列島の地域区分と織豊系城郭成立の権力的背景を共に解明するというダイナミックな構想を展開したことである。これによって従来の戦国史研究の諸成果をヴィジュアルに再構成することが可能になった。また守護大名の平地居館型城郭から戦国大名の山城タイプの拠点城郭への転換が16世紀の第2四半世紀・天文期だと特定したことは、従来あいまいに戦国期城郭と呼ばれていたものを段階区分して再評価する上でも、戦国期を時期区分するためにも、非常に有効な基準になる。近世城郭に本格的な縄張り分析のメスを入れたのも本論文が最初である。その成果によって、たとえば江戸城について従来我々が皇居で見たり古絵図から想像していたものは、徳川家康存命中の縄張りを変形し後退させたものであったという衝撃的な事実が明らかになった。またヨーロッパ中世の土造りの城跡の縄張り図を用いて日欧比較論を展開したのもこれが最初である。このように広い視野のもとに城郭の特徴と変遷を把握して、これを社会構造と地域比較の研究の史料として駆使し得た高い水準の論文である。

とはいえ、本論文にも問題がないわけではない。求心型の城郭を権力の求心性と対応させる見方は鮮やかだが、このテーマで評価された東国の大名が、出入り口（虎口）の発達分析においては対象からはずされて、もっぱら織豊権力の城郭を対象にして論じられている。今後「織豊系城郭」という概念の立て方に及んで議論されねばならないだろう。また地域的な分布を論ずる際にとりあげた城郭の同時代性を判定する基準にややばらつきが認められる箇所もあった。しかしこれらの点は本論文が学界に寄与した功績の大きさに比べれば、小さなものにすぎない。

よって本研究科委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと認定する。